

伝夢窓疎石撰『二十三問答』について

東京大学大学院 余新星

2021年8月26日

一、はじめに

本論文は夢窓疎石の撰述だと伝わる『二十三問答』が果たして夢窓の真撰であるか否かについて検証するものである。

明治28～29年に「禅宗」編輯局により編纂され、京都の貝葉書院の蔵版を用いて刊行された『校訂箋注 禅門法語全集』の第四篇に、夢窓疎石に帰される『二十三問答』という法語が収録されている。また大正十年六月に光融館から発行された山田孝道校訂の『禅門法語集』にも、同じく夢窓疎石撰とされる『二十三問答』が収録されている。しかしながら、この『二十三問答』には、同書の成立を記す序文や奥書などが含まれておらず、単に撰者を夢窓疎石、又は夢窓国師だと提示するのみであった。

筆者は『二十三問答』を解説する中で、この法語の文調は、夢窓の撰述で疑義が挟まれない『夢中間答集』と『谷響集』という二つの仮名法語とは大きくかけ離れるという印象を受けた。そこで、『二十三問答』の内容を精査し、同書が果たして夢窓が撰述したものなのかどうかについて考察を試みた。

夢窓の撰述であることが確実な『夢中間答集』や『谷響集』などといった仮名法語の内容と読み比べて分析した結果、『二十三問答』に使用される鍵用語、法語全体から見出される主旨及び思想的構造、個々の論題について示された見解などの違いから見て、同書を夢窓の真撰だとは認め難いことを提起したい。

二、『二十三問答』の概要

冒頭に述べた貝葉書院刊行の『校訂箋注 禅門法語全集』においては、『二十三問答』の解題について「本書は夢想（窓）国師が悟道の綱要二十三を問答体に示されたるもの蓋し簡にし明、頗る初心の人に益あるもの也」と記されている。また光融館から発行された山田孝道校訂の『禅門法語集』における『二十三問答』の解題では、「二十三問答は、夢窓国師が道俗の問いに応じて垂示せられたるものにて、はなはだ老婆親切なれば、初めて門戸を窺ふの士は、先づ此書を一読せざるべからず」と記される。いずれも『二十三問答』を夢窓が、初学者でも分かりやすいように仮名にて禅の教えを開示したものだとして解説した。このような解説は、『夢中間答集』の刊行由来とは一脈相通ずるように見えるのは言うまでもない。しかしこれがあくまでも『夢中間答集』の解題に対する安易な流用に過ぎないことは、これからの考察を通じて検証されよう。

『二十三問答』には、上述した貝葉書院と光融館により刊行された活字版に先だって、江戸時代にできた写本や木刻版が複数現存している。『国書総目録』によると、同書は元和四年（1618年）の写本が残り、現に駒澤大学図書館に収蔵されている¹。そして、現存する版本については以下の数点が挙げられている。

- ・元和寛永（1615～1644年）古活字版
- ・正保二（1645年）版
- ・正保五（1648年）版
- ・慶安元（1648年）版
- ・万治二（1659年）版
- ・寛文六（1666年）版
- ・安永七（1778年）版
- ・刊年不明の版

また小野玄妙・丸山孝雄編集の『仏書解説大辞典』における「二十三問答」の項では、同書を夢窓疎石の撰述とし、「道俗の所問に応じて仏法の大意を垂示したるものにして、其の所説極めて親切なるを以て、禅道の門戸を窺わはんとする者は、必ず一読すべき良書である」との解説を施したのは、前に引用した光融館刊行の山田孝道校訂版における解題をそのまま踏襲したことが明らかである。そして『二十三問答』の版本については、慶安元刊・正保五刊・慶安元年後刷という三つの版本を挙げている。『国書総目録』の記載と合わせて見れば、現存する『二十三問答』の写本や版本は概して江戸期に入ってから成立したものと分かる。

『二十三問答』は問答の体裁を採って内容が展開されるものの、各問答の間には緊密な連関性が見られ、筋道の通った論理を踏まえて著された書物だと見て良からう。この点に関して、『夢中間答集』においては問答と問答との間に、議論の主題や内容が必ずしも連関しないという特徴がより顕著である。つまるところ、その時その場での問いに応答したものが後に編纂されて書物になったという成立の過程は、『夢中間答集』にはその形跡を彷彿させる箇所がしばしば見られるが、『二十三問答』にはそれを裏付けるような根拠が薄く、むしろ最初から精密に論理を立てて著述した一つの纏まった文章だと見たほうが適切であろう。

三、『二十三問答』の思想内容

『二十三問答』はその題目の表す通り、二十三の問答から構成される。各問答にはそれぞれ章タイトルが付けられている。

- 一、「道心起こすべき事」、
- 二、「一心のむげやうの事」、

¹ この写本は現在、駒澤大学図書館の電子貴重書書庫からオンラインで閲覧することが可能になっている。

- 三、「よしあしかぎりなき事」、
- 四、「よしあしの源の事」、
- 五、「根本のむまれしなざる事」、
- 六、「佛生まれ死にたまはぬ事」、
- 七、「佛は人にかはりたる事」、
- 八、「佛むしけらとなる事」、
- 九、「妄念による事」、
- 十、「現在の果を見て過去未来を知る事」、
- 十一、「善根に有漏無漏のかはりある事」、
- 十二、「浄土をねかふ事」、
- 十三、「懺悔に罪をほろぶる事」、
- 十四、「懺悔に二つある事」、
- 十五、「誓願の事」、
- 十六、「廻向の事」、
- 十七、「臨終の事」、
- 十八、「何事もおもはずいたづらなるはあしき事」、
- 十九、「祈祷の事」、
- 二十、「佛と菩薩行の中にいづれ勝劣の事」、
- 廿一、「心のなきを佛にする事」、
- 廿二、「心のおこるをいかすべき事」、
- 廿三、「私のことばにあらず皆経文なる事」、

と要領よく各章の中心内容を提示している。

この中では、第一章～第九章は「心・仏・衆生」をめぐって論述を展開している。そして第十章～第十九章では、因果応報・有漏無漏の善根・浄土・懺悔・誓願・廻向・臨終・祈祷といった具体的なテーマをめぐって解説をしている。また第二十章～第二十四章は「無心無念」をめぐって説示を行っている。

まず第一章では修道の前提となる道心について説示した。浅く捉えれば、無常の理を知り名利を捨てる心が道心である。そして道心を起こすとは、浮世のありとあらゆる事が思う通りになることがないと弁えて、仏道に入ることを決心し、仏の教えを信じることだと説かれている。それに続いて、心という中心的概念をめぐって論述を展開していく。心が善悪を為す源であり、心の向け方によっては仏ともなるし、地獄にも落ちるのだと説かれる。さらに心については二種類あると示した。一つには、白や黒、西と東などを分別し、諸般の物事を思い計らう心である。この心は真実の心ではなく、仮に人の身体に宿るのみである。二には、我と人を分け隔てず、善悪などの二元対立を超えたところの心である。『二十三問答』においては、「仏心」という鍵概念を用いて後者を説明している。

この心は法界にあまねくして、ひとりぬしもなし、いできもせず、うせもせず、うつり

かはることなくして、たれものこらすもちたる也、是れを佛心と申し候。さればよしともあしとも思はず、何の心も何の念もなきぬ心のむけやうによりて、佛になるとは申す也。この心は妙法蓮華經とも申し、一切の菩薩とも申し、一切の佛とも申し候、この心の外に別の法はなく候。(『二十三問答』、『禪門法語集』上巻、一七頁)

物事を区別立てて、あれこれと思い計らう分別の心に対し、仏心は、善も悪もすべて思いはかることなく、一切の分別対立を超えて何の思念も生じない時の心である。このような無分別の心は、法界に遍くゆきわたり、個の主体が存在せず、生じてくることも消えて滅していくこともなく、しかも誰もが有しているものである。善悪などの分別をせず、心を調べて一念も生じないようにすることが仏に成るのだと言う。逆に、我と人、善と悪など二元対立的に物事を思いはかり、妄念が次々と生じたり滅したりするのが衆生の心である。

又佛の心も我等衆生をはなれず。たとへは月は佛の如し、くもりは衆生の如し、くもれともこんほん月はくらからず。又佛は鏡のごとし、うつる影は衆生に似たり、鏡に影うつれども、根本鏡は者をきらはす。……また佛は水の如し、波は衆生に似たり、波たてとも水は元の水にてかはらず。又心は實の佛也、念のおこるは衆生なり、念なければ心やかて佛也、曇なければ月明なり。むかふものなければ鏡に影もなし、波なければ水は元の水なるか如し。念なくば衆生たゞ佛なるべきを、妄念さまゝあるゆゑに、さまゝのいやしきかたちとなるなり。(同上、二一～二二頁)

佛とはなれたる衆生あるべからず、一たび妄想あるによりて、業因をそへて過去の業によりて、この世又むくひありて、さまゝの形をうけ、六道にめぐることたえず、かなしまざらんや。(同上、二三頁)

仏の心と衆生の心とは本質的に一つであると考えられている。思慮分別のない心が実の仏であると言う。思念が起こるのが衆生の心であり、思念がなければ直ちに仏の心である。つまるところ、思念がなければ衆生がそのまま仏であるはずなのに、様々な妄念があるために、種々の衆生としての下位の存在となったのである。

そして上に引いた文章の中に仏を「根本鏡」に譬えたように、仏心の不生不滅・不変遍在という性質を取り立てて表現するためには、『二十三問答』では「根本」という鍵用語を修飾語として多用する。

もるゝことなく法界にあまねきわれらが心、則ち根本まことの佛にて、犬鳥虫までも皆佛と一つなり、色かたちあるをまことの佛とおもふべからず。(同上、二一頁)

根本佛とも衆生ともいふべき名もなし。根本佛とは別にましゝゝて、その佛の心に妄念いできて、衆生になりたるにてはなし、たゝぬしなき法界に妄念おこりて衆生となり、念なくてそのまゝ法界なれば、佛となづけたるなり。(同上、二二頁)

まことの佛のことは、まへにくはしく申しつる如く、衆生の心にあるなり。その佛は色

もかたちもなく、大にもなくちいさき物にもなし、過去、現在、未來もなく、虚空の如くにしていたらずといふ所なく、いきしになく、いやしくもなし、是れ根本の佛也。(同上、三四頁)

漏れることなく法界に遍くゆきわたる我らの心が取りも直さず根本真実の仏であり、犬や鳥や虫までも皆全て仏と一つであるとされている。しかし根本仏とはいっても衆生の外に仏が存在し、その仏の心に妄念が生じてきて衆生になったのだというわけではない。ただ主体のない法界に妄念が起こり衆生となったのであり、妄念が生じなくてそのまま法界であれば、仏と名づけたのである。真実の仏とは、衆生の心にあるのである。その仏は色も形もなく、大きい物でも小さい物でもない。過去・現在・未來もなく、虚空のようで至らないという所はなく、生まれることも死ぬこともなく、位が低いということもない。これが根本の仏であると解説されている。

『二十三問答』においては、一念も生じない時の心を「ぬしなき法界」に同定し、それを仏心だに見なしている。その主体のない法界から妄念が生じれば衆生となり、何の妄念も生じずにそのまま法界であれば、それが取りも直さず仏であるとされている。これが『二十三問答』に通底する思想的構造である。

四、『二十三問答』と『夢中間答集』との相違

『二十三問答』の成立時期について、『国書総目録』では観応頃と記されており、小野・丸山『仏書解説大辞典』では観応改元頃と記されている。夢窓疎石が観応二年（1351年）（夢窓七十七歳）に逝去したことを考えて、もし『国書総目録』と『仏書解説大辞典』における記載が確実であるならば、『二十三問答』の成立は夢窓が辞世する年かその前年に当たり、夢窓の思想が最も円熟した最晩年のことになる。しかし、康永元年（1341年）（夢窓六十八歳）頃に刊行され、疑いなく夢窓の著である『夢中間答集』では、『二十三問答』とは異なる鍵用語を使用するのみならず、一部の共通する論題について表される観点も『二十三問答』とは大きくかけ離れるのが見られる。

教門との峻別を図り禅門の独自色を出すことが念頭に置かれているためであろうが、夢窓はその教示の中で「仏心」・「仏性」といった教理的な概念の使用を回避し、「本分の田地」または「本分」を中心概念として思想を展開している。

「本分の田地」とは一切の衆生が本来的に具えている仏の円満な覚りを意味する。それは「人々具足し、箇々円成す」るものだと言って、衆生ひとりひとりが誰しも不足なく十分に具えており、めいめい円満に成就しているものだと説かれている。本分の田地には凡聖・迷悟・淨穢といった分別が一切ないのであるが、無明の一念が生起して仏法世法・善念悪念といった種々の差別の相を現すのである。その夢幻のような分別妄想をすべて手放して、直に本分の田地に契合するのが禅門修行の宗旨である。

ここで迷いの原因となる妄念に関しては、『夢中間答集』において示される観点は『二十

三問答』とは大きく異なる。(以下は『二十三問答』を「廿三」と略記し、『夢中間答集』を「夢」と記す。)

【廿三】(心のおこるをいかゞすべき事) 心にうかぶことうちはらひて、何の念もなきやうにと油断なく候はゞ、おのづから御悟あるべし。(『二十三問答』、『禅門法語集』上巻、三八頁)

【夢】(諸縁ニ對スル時、常ニ此心ノウカフハ、過ナルヘシヤ) 一切ヲ放下セヨト、申セハトテ、外道ニ乗ノ、惡念ヲ制シテ、起サシトスルニハ、同シカラス、サヤウニスル事ハ、血ヲ以テ血ヲアラフカ如シ。(『夢中間答集』、二三三頁)

『二十三問答』において表される思想的構造では、「ぬしなき法界」から妄念が生じて衆生となったわけで、妄念が生じなければ、そのままの法界がすなわち仏であるとされている。要するに一念も生じない時には「われらが心」＝「ぬしなき法界」＝「根本仏」という図式が成立する。従って、妄念の生じないことが成仏するための肝要だとされている。さて、心(念)が起こったらどのように対処すべきかという課題について、上に引いた『二十三問答』の文章では、心に浮かんでくることを払いのけて、何の念も生じないようにと油断なく用心し続ければ、自ずから悟りを開くことができるのだと説かれている。これが「北宗」系の禅思想——妄念を除去することを通じて、衆生ひとり一人の内面に保ちながらも妄念・煩惱に覆われているために顕現できていない仏性を明らかにする——という考え方とは近いように見受けられる。

それに対し『夢中間答集』では、凡・聖の分け隔てがない本分のところから妄念が生じてきて様々な差別の相を現すのだと説かれるが、妄念妄想を除去する作為に対して否定的な姿勢を示している。上に引いた『夢中間答集』の文章は、「諸々の対象に触れた際に、常にこの心(念)が浮かんでくるのは過ちであろうか」という質問に対する夢窓の回答である。一切のことを手放せよと言っても、外道二乗の惡念を制御して起こさないようにすることとは同じではない。そのようなことは血を以て血を洗うようなものである、と言う。つまり、妄念を無くすように思い計らうのが二重の妄想になるのだと考えられている。『夢中間答集』では、生じてきた妄念妄想への対処については、「一切ノ善惡スヘテ、思量スルコトナカレ」、「別ニ工夫ナシ、放下スレハ便是ナリ」(『夢中間答集』、二三五頁)と説かれ、一切の分別妄想に対してはすべて思いはかつてはならず、また特に何か取り組むこともなく、ただ手放せばそれで良いのだと示されている。これは『二十三問答』における観点とは大きくかけ離れるのが良く見えよう。

そして、妄念のない心についても両書は異なる観点を示している。

【廿三】心は実の佛也。念のおこるは衆生なり。念なければころやかて佛なり。(『二十三問答』、『禅門法語集』、二二頁)

【夢】問：一切放下シテ、佛法世法ヲ、胸中ニオカスハ、コレヲ本分ノ田地ト、申スヘ

シヤ。 答：達磨大師ノ云、外ニ諸縁ヲオハス、内心アエクコトナクシテ、心牆壁ノコトクナラハ、道ニ入ヘシト云々大慧禪師、此語ヲ舉テ云、諸縁ヲ放下シテ、内心動セサルハ、道ニ入ル方便門ナリトイヘル意ナリ、若カヤウナル處ヲ、眞實ノ道ナリト思ハ、祖師ノ意ニソムケリト云々。（『夢中間答集』、二三五～二三六頁）

前に述べたように、『二十三問答』では、「念なき心一法界一仏」をゼロポイントとして論理を展開している。妄念が起こってくるのは衆生であり、妄念がなければ心は取りも直さず仏であるとされている。従って、法界にひとしき無念無心を極則だと見なしている。

それに対し『夢中間答集』では、「本分の田地」と言っテ衆生が本来的に具えている清浄なる悟りをゼロポイントとしている。一切の分別妄想を手放して、心の中に仏法・世法といった二元対立的な思い計らいが一切なければ、これを「本分の田地」と言うことができようかという問いに対して、夢窓は達磨の作だと伝えられる『二入四行論』の文章を引いた上で、それに対する大慧宗杲（1089-1163）の評釈をも引用して答えを為した。諸々の対象を手放して、内心が少しも動じないのは、それが悟りに入る方便門だというのである。もしこのような境地を眞實の悟りだと思えば、それは祖師の本意に背くことになると思われている。さらに『夢中間答集』の第69段において、「イマタ本心ヲサトラサル人、身心スヘテ滅盡シテ空寂ナル處ヲ、眞實ノ佛法ナリト思ヘル人アリ、此ハ是二乗ノ滅盡定、外道ノ非想定ナリ」（『夢中間答集』、三五〇頁）と論じられており、身も心もすべて滅し尽くした空寂な境地を二乗の滅盡定や外道の非想定だと位置づけ、それが大乘の極致ではないと見なされていた。

これまでの検証を通じて、基本的な思想内容において『二十三問答』は『夢中間答集』とは大きな差異が存することが窺えよう。そのみならず、一部の共通する論題についても両書の間になかなからぬ相違が見受けられる。

（一）有漏・無漏の善根について

【廿三】人のいみしくさかへたるをうらやみ、又は後の世にも人と生れば、國所領おほくもち、しからずは浄土に生れてたのしみをきはめばやとて、經を讀み佛を拜み、寺をつくり堂をたて、布施をなし供養をのぶるを、有漏の善と申し候。結縁はくちすまじく候へども、是れはわろく候。一ふさの花をさゝけ、一ひねりの香をたきても、わか心法界即佛なることを知らしめ、縁をもむすばしめばやとねかひてなすを、無漏の善とてたつとき善根とは申す也。（『二十三問答』、『禪門法語集』、二四～二五頁）

【夢】善根ヲ修スルハ、福報ヲ得ヘキ業因ナリ、漏者煩惱ナリ、人天ノ福報ヲ求テ善ヲ修スルハ、貪欲ノ心ヲ起セルカ故ニ、コレヲ有漏ノ善根ト名ツケタリ、一善ヲ修シテモ、世福ヲハノソマス、偏ニ無上道ノタメニ、廻向スルヲハ、無漏ノ善根トイヘリ、善根ニ有漏無漏ノ差別アルニハアラス、若善ヲ修スル人ノ心、有漏ナレハ其修スルトコロノ善根皆有漏ノ福業トナルナリ。（『夢中間答集』、一五～一六頁）

上に引いた『夢中間答集』の文章は有漏・無漏の善根についてより明確な形で定義づけている。善根を修することは福報を得るための業因である。漏とは煩惱である。人間界や天界の福報を求めるために善を修することは、貪欲の心を起こしているの、これを有漏の善根と名付けるのだ、と『夢中間答集』において解説されている。有漏の善根に関して『二十三問答』では具体例を示すことにより解説を行い、意味内容から見れば両書の解釈は特に不一致が存在しない。しかしながら、有漏の善根に対する姿勢においては両書の間大きなギャップが存在する。

『二十三問答』では、「有漏の善とて、一むきにきらひすつべからず、繪にかき木にてつくりたる佛を見、一句一偈の御法をきく事、その縁くちずして、利益多く身なし、心に思ふ一たびその報なしといふことあるべからず」（『禪門法語集』、二五頁）と説き示されるように、有漏の善といってもひたむきにそれを嫌い、なげ捨てるべきではない。絵に描かれ木で作られた仏を見たり、一句一偈の仏法を聞いたりすることは、その縁は衰えてむなくなるものがなく、もたらす利益が多くある。身に行い、心に思うことは、その報がないというのが一度もないはずであろうと説かれている。従って、有漏の善根を完全に否定はせず、仏との結縁や善業によりもたらされる利益を認める姿勢を取っている。それに対し『夢中間答集』の第二段では、「福ヲ祈ラムタメニ佛神ヲ帰敬シ、經咒ヲ誦持スルハ、結縁トモ成ヌヘケレハ、ユルサル方モアルヘシヤ」（福を祈らんがために仏や神を敬い帰依し、経文や陀羅尼を唱えるのは、仏や神との縁を結ぶことになるであろうから、許されても良からう）（『夢中間答集』、一二頁）という問いに対して明らかに否定的な答えを出している。

世福ヲ求ムルホトノ愚人ハ、トカク申スニタラス、タマ々々人身ヲ得テ、アヒカタキ佛法ニアフテ、無上道ヲハ求メスシテ、アタラ經咒ヲ誦持シテ、世福ヲ求ムル人ハコトニ愚ニハアラスヤ、……タトヒ佛法ヲ修行シテ、自モ菩提ヲ證シ、亦衆生ヲ度セムト、大願ヲ発セル人タニモ、若佛法ニオイテ、愛着ノ情ヲ生スレハ、自利利他、トモニ成就セス、況ヤ我身ノ、出離ノタメニモアラス、亦衆生利益ノヨシニモアラス、タ々世間ノ名利ノタメナル、欲情ニテ佛神ヲ帰敬シ、經咒ヲ讀誦セハ、イカテカ、冥慮ニカナハムヤ、（『夢中間答集』、一三頁）

『夢中間答集』では善業を修行するのは、どこまでも無上の菩提を求め、自らも悟りを開き、また衆生をも済度しようという願心が貫き通している。我が身の解脱のためでもなく、衆生を利益するためでもなく、ただ世間の名利を獲得したいという欲情で仏や神を敬い帰依し、経文や陀羅尼を唱えるのは、どうして神仏の思慮にかなうことができようか、と答えられているように、神仏との結縁になるからといって有漏の善根を認めるような考え方は一蹴された。

また無漏の善根についても、両書の解釈に立場の違いが見える。

『二十三問答』では無漏の善根について、一束の花をささげ、ひとつまみの香を焚いても、わが心の法界が取りも直さず仏であることを知らせるために縁を結びたいのだと願って行

うのは、無漏の善根と言って尊い善根であると申すのだと解釈されている。『夢中間答集』においては、一つの善を修めても世間の福報を望まず、ひたすら無上道のためにふり向けるのを無漏の善根と言っているのだと解釈される。ここの無上道は、『夢中間答集』では無上菩提とも言い、本有清浄の覺りを契証することを意味する。そして善根に有漏と無漏の差別があるわけではなく、善を修める人の心に有漏心と無漏心との違いがあるから、「有漏の善根」と「無漏の善根」との区別が生じたのだと説明される。さらに有漏心と無漏心については詳細な説明が施されている。教門では唯有漏心・唯無漏心・亦有漏亦無漏心・非有漏非無漏心という四種の区別を引いた上で、『夢中間答集』では総じて有漏・無漏に分けることにし、凡夫・外道のみならず、二乗・菩薩までもまた有漏心があるとされる。ただ世間の福報を求めず、小乗の涅槃をも求めず、ひたすら無上の菩提を求めて修行することを無漏の善根だと解釈されている。

総じて言えば有漏・無漏の善根について行われた解釈の明晰さにおいて、両書の差異を感じ取れるだけでなく、施された解説から両書の立場の違いも見受けられる。『二十三問答』では善業を修行するのは「わが心一法界一仏」に帰着するのに対し、『夢中間答集』では本有清浄の覺りという無上の菩提に回帰するためであった。

(二) 浄土について

【廿三】まことの浄土は心のうちに候。ゆめ々心の外にもとむまじきにて候、何の念もおこさず、よろづ見ず聞かず、ありともなしとも思はず、わか身ぬしなく、虚空にひとしく、何のあともなく、とまるところもなくして候はん人の到るところが、やがて浄土にて候、この世界をはなれて別に浄土なく候、かやうに知り候へは、ねかふべき浄土もなく、いとふべき娑婆世界もなし、たゞ萬法一心にて候、一心即ち萬法にて候、佛も浄土も心の外に別なく候。(『二十三問答』、『禅門法語集』、二六頁)

【夢】惡趣ノ外ニ、浄土ヲネカヒ、自力他力ヲ分チ、難行易行ヲ論スルハ、皆是了義大乘ノ題目ニアラス、若此題目ヲ信スル人ハ、イマタ分明ニ悟ヲ開クコトナクトモ、妄念ノ起ルニヨリテ、退屈スヘカラス、況ヤ惡趣浄土ヲ論シ、自力他力ヲ分タムヤ、惡趣浄土ノ差別ハ、一念ノ上ヘニウカヘル、假相ナリ。(『夢中間答集』、四〇一頁)

佛説ノ中ニ、了義經ト不了義經トノ二種アリ、末代ノ衆生、了義經ノ説ニ依リテ、不了義ノ説ニ依ルヘカラス、凡夫ノ外ニ佛アリ、穢土ノ外ニ浄土アリト説ルハ、不了義ノ經ナリ、凡聖浄穢皆差別ナシト明セルハ了義大乘ノ説ナリト云々(『夢中間答集』、四〇七)

浄土について『二十三問答』では、真実の浄土は心の中にあるのだと言われる。決して心の外に求めてはならない。何の念も起こさないで、諸々の認識対象を見も聞きもしないで、あるとも無いとも思わないで、自らの身体には主宰としての実体がなく、何の形跡もなく、(心が)止まるところのない人が到達するところが、取りも直さず浄土である。この世界を

離れてはほかに浄土がないのである。このように認識していれば、願うべき浄土もなく、厭うべき娑婆世界もない。ただ万法（一切の存在）がこの一心であり、一心が取りも直さず万法（一切の存在）である。仏も浄土も心の外に別に存在しないのである、と説かれている。従って『二十三問答』においては、浄土は心の中にあると主張した上で、浄土を念なき心、及び仏と等置している。

それに対し『夢中間答集』では、悪趣と浄土との差別は（無明の）一念の上に浮かんできた仮の姿であるとされている。凡夫とは別に仏が存在し、穢土とは別に浄土が存在すると説くのは不了義の経である。凡・聖、浄・穢はみな差別なしと明らかに示すのは了義大乘の教えであると言われている。

（三）神仏の関係について

【廿三】神と仏とは水と浪のごとし、へだてなし、一つの神よろづの神にてまします、一切の神本地はただ一つ也。……衆生の心も佛の心も神の心もかはるべからず、……衆生の心の外に神もなし、神をまつるは心をまつる也。心ををさめて心大空の如く、執心執着なく、心念なくば、わか身すなはち神也、心の神をまつるべし。（『二十三問答』、『禅門法語集』、三二～三三頁）

【夢】神ハ皆佛菩薩ノ垂迹ナリ。イカテカ實ニ。法師ヲミクミ玉フコトアラムヤ。……八幡大菩薩昔豊前国宇佐宮ニ。神トアラハレサセ給テ後。一百年アリテ。山城国男山ニ。ウツラセ給シ時。行教和尚ノ三衣ノタモトニ三尊ノ靈像ヲ現シ給キ。（『夢中間答集』、五七頁）

『二十三問答』では、神と仏とは水と浪のような関係で、その間に分け隔てが存しないと考えられる。一つの神がすべての神であり、そして一切の神の本地はただ一つのみであると言う。それは、法界にひとしき念なき心である。この念なき心を軸にして、衆生の心も仏の心も神の心も異ならぬものになる。かくして一切の神が同質化され、衆生・仏・神も等一視されるようになっている。

それに対し『夢中間答集』における神仏関係をめぐる論述が少ないものの、中世に定着していた本地垂迹説を反映している論述が散見される。上に引いた『夢中間答集』の文章では、神はみな仏菩薩が跡を垂れて現れたものだと言われる。そして同じ『夢中間答集』の第7段において、伊勢と八幡の神についての論述があり、それぞれの本地仏に関して言及されなかったが、『二十三問答』において一切の神を同一視するような論述が皆無である。

五、終わりに

これまでの考察を通じて『二十三問答』は、夢窓疎石の撰述である『夢中間答集』とは数々の点において大きくかけ離れることが検証された。この著作を夢窓の真撰だとはとても考

え難い。一方、『二十三問答』では『夢中間答集』にも見られる多くの論題について論述が行われ、しかも『夢中間答集』に使用された「第二の月」や「夢幻」などといった譬喩を用いて論説を展開した。この仮名法語が撰述された際に著者は『夢中間答集』を念頭に置いていたことが窺い知れよう。

『二十三問答』は江戸初期に撰述された可能性が高いが、その成立に関してはまだ確実なことが分かっていない。歴史上の高名な禅僧に仮託して世に現れた作品ではあるものの、少なからぬ写本や版本などが現存していることから、その受容度の高さを彷彿させる。江戸初期に名僧に仮託した一連の作品群があるが、その仏教思想史における意義を考えるのは今後の課題としたい。